埼玉純真短期大学研究論文集　第 12 号　PP.15-28

保育専攻学生の保育環境に対する意識

Awareness of Child Care Environment by College Students Majoring in Childcare.

上原　典子*　　加藤　房江**

要旨　本研究は，B 短期大学と C 専門学校の学生の保育環境の意識とそれに関する要因について明らかにすることであった。B 短期大学と C 専門学校との意識の差を検証するために，対応のない t 検定を行った。その結果，「自然環境と関わり」と「虫に対する親和感」において，B 短期大学の方が有意に高いことが示された。しかし，それ以外の項目においては，両校の差は無く，自然環境に興味関心を持っている学生が全体の 7 割に及び，大半の学生が，環境に関して興味関心をもっていた。また，理想と考える園での自然環境の豊かさへの希望や子どもへの自然環境への必要感では，9 割前後の高い割合で，保育の自然環境の大切さへの認識が明らかになった。保育所保育指針の中でも，環境の大切さを十分伝えている中で，学生も自然環境が子どもの成長において大切なものであると認識していることが明らかになった。一方では，自然環境に対する興味や関心がほとんどない学生や，自然環境との関わりにおいても，少ないあるいはほとんどなかったと回答した学生も少数おり，そうした学生は，生育環境等において自然環境との関わりが少ないことも明らかになり，学生自身の幼少期から現在の経験や生活環境なども自然環境に対しての認識に多少なりとも影響していることが示唆された。

【キーワード：領域環境　保育専攻学生　自然体験】

Ⅰ．はじめに

近藤ら（2016）[1] は，幼稚園・保育所・認定こども園で使われる「環境」という言葉の意味の中の1つについて，身近な環境，保育環境，園庭環境，物的環境，人的環境という意味合いで使われる場や空間，物や人を示しているものであると述べている。保育所保育指針における領域「環境」の具体的な記載事項については，領域「環境」は，自然や社会の事象などの身近な環境に積極的に関わる力を育て，生活に取り入れていこうとする態度を養う観点から示されており，2018年改訂の，保育所保育指針　第1章「保育所保育に関する基本原則」（4）保育の環境の中で，保育環境の重要性を以下のように謳っている（保育所保育指針解説書，2018）[2]。　保育の環境には，保育士等や子どもなどの人的環境，施設や遊具などの物的環境，更に自然や社会の事象などがある。保育所は，こうした人，物，場などの環境が相互に関連し合い，子どもの生活が豊かなものとなるよう，次の事項に留意しつつ，計画的に環境を構成し，工夫して保育をしていかなければならない。

（ア）子ども自らが環境に関わり，自発的に活動し，様々な経験を積んでいくことが出来るよう配慮すること。

（イ）子どもの活動が豊かに展開されるよう，保育所の設備や環境を整え，保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。

（ウ）保育室は，温かな親しみとくつろぎの場となるとともに，生き生きと活動できる場となるように配慮すること。

（エ）子どもが人と関わる力を育てていくため，子ども自らが周囲の子どもと関わっていくことが出来る環境を整えること。

＊　大原こども保育専門学校　専任講師
＊＊　埼玉純真短期大学　こども学科　准教授

平成20年改訂版と29年改訂版の対象表を示す（表1）。今回の改訂に際して新たに変更や付加された箇所は，下線で示す（相馬，2018）[3)]。

表1　保育所保育指針　新旧対照表

旧　平成20年告示	現行　平成29年告示
（3）保育環境 保育環境には，保育士等や子どもなどの人的環境，施設や遊具などの物的環境，更には自然や社会の事象などがある。保育所は，こうした人，物，場などの環境が相互に関連し合い，子どもの生活が豊かなものになるよう，次の事項に留意しつつ，計画的に環境を構成し，工夫して保育しなければならない。 **ア**　子ども自らが環境に関わり，自発的に活動し，様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。 **イ**　子どもの活動が豊かに展開されるよう，保育所の設備や環境を整え，保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。 **ウ**　保育室は，温かな親しみとくつろぎの場となるとともに，生き生きと活動できる場となるように配慮すること。 **エ**　子どもが人と関わる力を育てていくため，子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。	（4）保育環境 保育の環境には，保育士等や子どもなどの人的環境，施設や遊具などの物的環境，更には自然や社会の事象などがある。保育所は，こうした人，物，場などの環境が相互に関連し合い，子どもの生活が豊かなものになるよう，次の事項に留意しつつ，計画的に環境を構成し，工夫して保育しなければならない。 **ア**　子ども自らが環境に関わり，自発的に活動し，様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。 **イ**　子どもの活動が豊かに展開されるよう，保育所の設備や環境を整え，保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。 **ウ**　保育室は，温かな親しみとくつろぎの場となるとともに，生き生きと活動できる場となるように配慮すること。 **エ**　子どもが人と関わる力を育てていくため，子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。

（二）教育に関わるねらい及び内容 ウ環境 周囲の様々な環境に好奇心を持って関わり，それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。 （ア）ねらい ①身近な環境に親しみ，自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。 ②身近な環境に自分から関わり，発見を楽しんだり，考えたりし，それを生活に取り入れようとする。 ③身近な事物を見たり，考えたり，扱ったりする中で，物の性質や数量，文字などに対する感覚を豊かにする。 （イ）内容 ①安心できる人的及び物的環境の下で，聞く，見る，触れる，嗅ぐ，味わうなどの感覚の働きをする。	<u>3　3歳以上児の保育に関するねらい及び内容</u> ウ環境 周囲の様々な環境に好奇心をもって関わり，それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。 （ア）ねらい ①身近な環境に親しみ，自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。 ②身近な環境に自分から関わり，発見を楽しんだり，考えたりし，それを生活に取り入れようとする。 ③身近な事象を見たり，考えたり，扱ったりする中で，物の性質や数量，文字などに対する感覚を豊かにする。 （イ）内容 ①<u>自然に触れて生活し，その大きさ，美しさ，不思議さなどに気付く。</u>

②好きな玩具や遊具に興味や関心を持って関わり，様々な遊びを楽しむ。	②生活の中で，様々な物に触れ，その性質や仕組みに興味や関心を持つ。
③自然に触れて生活し，その大きさ，美しさ，不思議さなどに気付く。	③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
④生活の中で，様々な物に触れ，その性質や仕組みに興味や関心を持つ。	④自然などの身近な事象に関心をもち，取り入れて遊ぶ。
⑤季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	⑤身近な動植物に親しみをもって接し，生命の尊さに気付き，いたわったり，大切にしたりする。
⑥自然などの身近な事象に関心を持ち，遊びや生活に取り入れようとする。	⑥日常生活の中で，我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
⑦身近な動植物に親しみを持ち，いたわったり，大切にしたり，作物を育てたり，味わうなどして，生命の尊さに気付く。	⑦身近な物を大切にする。
⑧身近な物を大切にする。	⑧身近な物や遊具に興味を持って関わり，自分なりに比べたり，関連付けたりしながら考えたり，試したりして工夫して遊ぶ。
⑨身近な物や遊具に興味を持って関わり，考えたり，試したりして工夫して遊ぶ。	⑨日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
⑩日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。	⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
⑫近隣の生活に興味や関心を持ち，保育所内外の行事などに喜んで参加する。	⑫保育所内外の行事において国旗に親しむ。

近藤ら（2016）[4] によれば，一人の人間が生活し発達していくには，広い意味で「環境」とかかわり，しかも相互作用が課題になる。乳幼児期の心身の発達は著しく，周辺の環境から影響を大きく受ける。そのため，この時期に，どのような環境の中で生活しているのかが重要な意味を持つのであると，「環境を通して行う」ことの意義を述べている。

田宮（2011）[5] によると，これからの保育は，環境保育を意識しながら臨むことが求められ，どのように幼児のための環境づくりを進めたらよいかを3つ挙げている。 1,「生活の中で感性を育てること」意識する 2,「つながりに気づく活動」を積み重ねる 3,「子どもの気づきをうながすコミュニケーション」を大切にする

保育士養成校であるC専門学校は，保育士養成を目的とし，2年間で保育士資格取得を目指している。学生は，資格取得のため，1年次2月に保育所へ2週間，2年次6月に児童祉施設へ2週間，9に月2週間，合計3回の約6週間の実習で，保育士資格に必要な実習単位を取得する。B短期大学は，こども学科として，幼稚園教諭二種免許と保育士資格の取得を目的としている。幼稚園教諭二種免許状の取得においては，幼稚園における4週間の実習が必要であり，1年次の9月に1週間，2年次の5月から6月に3週間行っている。保育士資格の取得には，施設実習における12日間の実習が必要である。保育所における前期実習は，11日間必要であり，2年次の6月から7月に行い，後期実習も同じく11日間 2年次9月に行っている。保育士資格を取得するためには，大学内の授業に加えて，学外での保育所および施設における実習をし，単位を取得する必要がある。保育士は，女の子には大変人気の高い職業であり，新小学1年生の女の子が考える「将来就きたい職業」トップ20の第7位（株式会社クラレ，2017）[6] と，かなり上位に位置する。このように，保育士は現在も変わらず人気の高い職業であるということが理解できる。保育士養成校で保育士を目指す学生たちは，少なからず保育そのものに憧れを抱き，勉学に励んで

いる。しかし，実習を行うまでの大多数の学生は，実際の保育現場を目にする機会は少ないと思われる。保育士を目指し勉学に励む学生たちは，どのような保育のイメージをよりどころにして保育士を目指しているのだろうか。その手がかりとして，学生が入学時に語る志望動機では，乳幼児の頃に通っていた保育所や幼稚園での経験，そこで関わった憧れの先生の存在，さらには，中学校の職業体験授業で保育所を選択した場合，ボランティア活動が一番記憶に新しい保育現場としてあげられることが多い。多くの学生はこのようなイメージを持ち，保育士になる為の勉学に励んでいると推測される。では実際，保育環境についてどのような意識をもっているのかを明らかにしたいと考えた。また，環境の重要性は，授業を通してある程度は理解しているとしても，どのようにイメージしているのか確かめるため，具体的に保育室のイメージ画を描いてもらった。このイメージ画を描くに当たり，「理想の園で重視する点」をあげてもらうことで，環境の重要性の理解度を知る手がかりとしたいと考えた。

Ⅱ．方法

調査対象　A県内のB短期大学1年生61名に依頼し，実施した。また，A県内のC専門学校の1年生50名にも同じ条件で依頼し，計111名を調査対象とした（Table1）。

調査時期　平成29年11月上旬に実施した。この時期は，実習経験が浅い時期であり，今まで経験してきた経験に基づいて保育者としての希望や期待を持っている時期である。

調査手続き　授業終了後に実施した。事前に倫理的配慮として，「研究の目的」「自由参加であること」「個人が特定されないこと」「個人情報は厳守すること」を説明して依頼し，無記名で回答を求めた。両校とも同じ条件での回答を求め，所要時間は，10分程度であった。回答数は，111名（回収率100％）であった。

Table1　　調査対象者の学校別内訳

	B短期大学	C専門学校	合計
人数 （％）	61名 （55％）	50名 （45％）	111名 （100％）

質問紙の構成

以下の4つの項目に対して自由記述で回答を求めた。

「環境に対する意識調査」

1）自然環境に対する興味関心

質問1　あなたは，自然環境に興味関心はありましたか？

1.「非常にあった（5点）」 2.「あった（4点）」 3.「少しあった（3点）」 4.「ほとんどなかった（2点）」 5.「全くなかった（1点）」の5段階で回答を求めた。

2）自然環境と関わり

質問2　あなたは，今まで，自然環境と関わりがありましたか？

1.「非常にあった（5点）」 2.「あった（4点）」 3.「少しあった(3点)」 4.「ほとんどなかった(2点)」 5.「全くなかった（1点）」の5段階で回答を求めた。

3）体験した遊び

質問3　質問2に関連した遊びはどのようなものでしたか。」の教示文において，今まで，自然環境と関わってきた経験の中でしてきた遊びについて，自由記述にて尋ねた。

4）自然環境が豊富であることについての希望

質問4　あなたが理想の園を作るとしたら，自然環境が豊富であることを希望しますか？

1.「たくさん希望する(5点)」 2.「希望する(4点)」 3.「少し希望する（3点)」 4.「ほとんど希望しない(2点)」 5. 全く希望しない(1点)」の5段階で回答を求めた。

5）理想の園で重視する点

質問5　「理想の園を描いた際，どこを重要視しましたか？」の教示文において，理想の園についてデザインを描いた際，重要視した点ついて尋ねた。

6）子どもへの自然環境の必要感

質問６　あなたは，子どもが成長するために自然環境が必要だと思いますか？

1.「非常に必要（5点）」 2.「必要（4点）」 3.「少し必要(3点)」 4.「ほとんど必要ない(2点)」 5.「全く必要でない（1点）」の5段階で回答を求めた。

7）虫に対する親和感

質問７　虫は（園でかかわる虫の範囲）嫌がらずに扱えますか？

1.「得意に扱える(5点)」2.「扱える(4点)」3.「どちらともいえない（3点）」 4.「苦手である(2点)」5.「かなり苦手である（1点）」の5段階で回答を求めた。

8）その他，自分が理想とする園についてのデザイン画をお願いした。

Ⅲ．結果

1．各質問項目の記述統計及びカテゴリー分析

1）自然環境に対する興味関心

「あなたは，自然環境に興味関心はありましたか？」に関して，非常にあった25人（24.0％），あった47人（45.2％），少しあった 22人（21.2％），ほとんどなかった 10人（9.6％），全くなかった0 人（0.0％），と学生が回答した（Table2）。

「自然環境に対する興味関心」の平均値および標準偏差は，M＝3.8（SD＝.90）であった。

Table2　自然環境に対する興味関心　（N ＝ 104）

評定段階	人　数	%
5. 非常にあった	25 人	24.0%
4. あった	47 人	45.2%
3. 少しあった	22 人	21.2%
2. ほとんどなかった	10 人	9.6%
1. 全くなかった	0 人	0.0%
計	104 人	100.0%

2）自然環境と関わり

「あなたは，今まで，自然環境と関わりがありましたか？」に関して，非常にあった39人（37.1％），あった51人（48.6％），少しあった11人（10.5％），ほとんどなかった4人（3.8％），全くなかった0人（0.0％）と学生が回答した（Table3）。

「自然環境と関わり」の平均値および標準偏差は，M＝4.2（SD＝.77）であった。

Table3　自然環境と関わり　（N ＝ 105）

評定段階	人　数	%
5. 非常にあった	39 人	37.1%
4. あった	51 人	48.6%
3. 少しあった	11 人	10.5%
2. ほとんどなかった	4 人	3.8%
1. 全くなかった	0 人	0.0%
計	105 人	100.0%

3）体験した遊び

「質問2に関連した遊びはどのようなものでしたか？」の教示文に対する，自由記述の結果についてカテゴリー分析を行なった。その結果「園庭での遊び」「植物遊び」「自然体験」「ごっこ遊び」「栽

培/収穫」「飼育」の6つのカテゴリーを抽出した　（Table4）。

Table4　体験した遊び　（N = 103）

カテゴリー	記述内容の例
園庭での遊び	砂遊び　泥遊び　泥だんご作り
植物遊び	色水遊び　押し花　花摘み　木の葉 / 木　花冠 / 首飾り　花探し 数珠玉アクセサリー作り　果物狩り
自然体験	山登り　木登り　川遊び　水遊び
ごっこ遊び	秘密基地　探検ごっこ　鬼ごっこ　ままごと　かくれんぼ
栽培 / 収穫	芋ほり　野菜の栽培 / 収穫　田んぼ / 畑遊び　植物を育てる　植物遊び
飼育	虫取り　虫の飼育　魚の飼育　動物の飼育

4）自然環境が豊富であることについての希望

「あなたが理想の園を作るとしたら，自然環境が豊富であることを希望しますか？」に関して，たくさん希望する 29人（27.9％），希望する58人（55.8％），少し希望する 16人（15.4％），ほとんど希望しない1人（0.9％），全く希望しない0人（0.0％）と学生が回答した（Table5）。

「自然環境が豊富であることについての希望」の平均値および標準偏差は，M＝4.1（SD＝.68）であった。

Table5　自然環境が豊富であることについての希望　（N = 104）

評定段階	人　数	%
5. たくさん希望する	29 人	27.9%
4. 希望する	58 人	55.8%
3. 少し希望する	16 人	15.4%
2. ほとんど希望しない	1 人	0.9%
1. 全く希望しない	0 人	0.0%
計	104 人	100.0%

5）理想の園で重視する点

質問5「理想の園を描いた際，どこを重要視しましたか？」の教示文において，理想の園についてデザインを描いた際，重要視した点の自由記述についてカテゴリー分析を行なった。その結果「園舎」「園庭」「園の周辺環境」の3つのカテゴリーを抽出した（Table6）。

Table6　理想の園で重視する点　（N = 103）

カテゴリー	記述内容の例
園舎	光が入りやすい　色彩豊か　バリヤフリー　中庭がある オープンテラス　木造建築　体操ができる部屋　ツリーハウス 子育て支援　安全な角の無い園舎　音楽室　ガラス張り 自由に製作ができる　絵本紙芝居の部屋　広い園庭 ベランダで作物を育てる　プラネタリューム
園庭	魚が泳ぐ池がある　動植物と触れ合える環境　植物の栽培ができる 動物を放し飼いにする　畑，果物のなる木を植える 緑 / 木 / 花が沢山ある　自然が沢山ある　木登り用の木がある 木やタイヤの遊具　机椅子を置く　自然を利用した遊具 のびのび活動できる広さ　植物が沢山ある　山，川がある 水遊びスペースが充実している　砂場，遊具の充実 泥遊びスペースがある　広い園庭　芝生
園の周辺環境	森の隣に園舎がある　病院が併設されている 老人ホームが併設されている

6）子どもへの自然環境の必要感

「あなたは，子どもが成長するために自然環境が必要だと思いますか？」に関して，非常に必要55人（55.6％），必要39人（39.4％），少し必要３人（3.0％），ほとんど必要ない２人（2.0％），全く必要でない０人（0.0％）と学生が回答した（Table7）。「子どもへの自然環境の必要感」の平均値および標準偏差は，M＝4.5（SD＝.66）であった。

Table7　子どもへの自然環境の必要感　（N = 104）

評定段階	人　数	%
5. 非常に必要	55 人	55.6％
4. 必要	39 人	39.4％
3. 少し必要	3 人	3.0％
2. ほとんど必要ない	2 人	2.0％
1. 全く必要でない	0 人	0.0％
計	99 人	100.0％

7）虫に対する親和感の実態

「虫は（園でかかわる虫の範囲）嫌がらずに扱えますか？」に関して，得意に扱える 34人（33.7％），扱える36人（35.6％），どちらともいえない14人（13.9％），苦手である９人（8.9％），かなり苦手である８人（7.9％），と学生が回答した（Table8）。「虫に対する親和感」の平均値および標準偏差は，M＝3.8（SD＝1.1）であった。

Table8　　虫に対する親和感　　（N ＝ 101）

評定段階	人　数	%
5. 得意に扱える	34 人	33.7%
4. 扱える	36 人	35.6%
3. どちらともいえない	14 人	13.9%
2. 苦手である	9 人	8.9%
1. かなり苦手である	8 人	7.9%
計	101 人	100.0%

2. B短期大学とC専門学校との意識の比較

「1）自然環境に対する興味関心」,「2）自然環境と関わり」,「4）自然環境が豊富であることについての希望」,「6）子どもへの自然環境の必要感」,「7）虫に対する親和感」のそれぞれの項目について，B短期大学とC専門学校との意識の差を検証するために，対応のないｔ検定を行った（Table9）。その結果,「自然環境と関わり」（ｔ（66）=2.54,p<.05）において，B短期大学の方が有意に高いことが示された。また,「7）虫に対する親和感」（ｔ（57）=7.01,p<.001）においても，B短期大学の方が有意に高いことが示された。

Table9　　ｔ検定による項目得点の平均値（SD）　　（N ＝ 101）

	B短期大学	C専門学校	ｔ値
1. 自然環境に対する興味関心	3.72(0.90)	4.00(0.90)	1.56
2. 自然環境と関わり	4.36(0.59)	3.96(0.94)	2.54*
3. 自然環境が豊富であることについての希望	4.00(0.75)	4.26(0.54)	1.90
4. 子どもへの自然環境の必要感	4.39(0.73)	4.62(0.54)	1.75
5. 虫に対する親和感	4.42(0.54)	2.93(1.21)	7.01***

*p<.05,　　***p<.001

Ⅳ．考察

本研究の対象は，B短期大学及びC専門学校の1年生である。またB短期大学は，田畑に囲まれ，自然に恵まれた環境にあり，キャンパスの庭には植物も整備されて季節の花がにぎわっている。一方のC専門学校の立地は，鉄筋コンクリートの高層ビルに囲まれ，木や土といった自然の物は少ない都会の学校である。こういった真逆の環境の中で保育の道を志す学生111名を対象とし,「保育環境の意識」とそれに関する要因について検討することを目的とした。

「自然環境に対する興味関心」に関して，非常にあった25人，あった 47人の回答を合わせて，全体の7割以上にも及ぶ学生が，自然環境に対し興味関心を持つ実態が明らかになった。一方では，興味関心はほとんどなかった学生が 10人（9.6%）もいたことが分かった。

「自然環境と関わり」に関しては，非常にあった39人（37.1%），あった51人（48.6%）を加えて関わりがあったと答えた学生は，85%を越えており，多くの学生が自然との関わりをもちながら成長してきた実態が分かった。しかしここで注目したい結果は，少しあったと回答した学生が11人（10.5%），ほとんどなかったと回答した学生が4人（3.8%）にも及んだという点である。この結果から，幼少期に何らかの事情から，自然環境への接触をもつことがなく，自然での様々な経験もしたことがない学生が少数ながら存在していることが明らかになった。

B短期大学とC専門学校において，t検定を行った結果，「自然環境と関わり」において，B短期大学の方が有意に高いことが示された。これは，B短期大学の学生は，自然環境の残っている関東圏から通学している学生多くが在籍しており，比較的自然環境に恵まれた中で生活してきたという背景による自然との関わりの深さを表していると思われる。C専門学校においては，自然環境の残っている関東圏から通学している学生が少数いるものの，学生の多くは学校近隣の都会に近い環境や都心から通学してきている。

無藤（2018）[7] によれば，大人も子どもも自然に触れることで美しさに出会い，不思議に思い，時には脅威を感じるなど，さまざまな思いをめぐらしながら自然と向き合っているところは同じである。しかしながら，多くの子どもにとって場所は関係なく，身近な場所であれ非日常的な場所であれ，自然を感じているといえる。とはいえ，昨今，社会生活の変化や天災の影響，家庭環境などにより，子どもたちの体験不足が指摘されている。汚れるのを嫌がり戸外で遊ばない子，虫を嫌がりそばに寄ろうとしない子，すぐ疲れたといって歩かない子が見られるようになってきており，入園までの経験の違いを強く感じることがあると，自然環境への経験不足からの影響を指摘している。

田川ら（2018）[8] は，昆虫を好きな学生のうち2割は，その理由として過去に昆虫とふれあった経験を挙げていることを指摘し，昆虫とふれあう経験が学生の昆虫に対する感情にポジティブに影響を与えていることが予想されると述べている。今回の対象学生111名は現在19歳～20歳の学生を対象としており，子ども達を取り巻く環境が，変化しつつある時代に幼少期を送っていた学生たちである。地域差や親などの身近な大人の自然環境の考え方などに左右されていることが推察される。

「体験した遊び」については，自然環境と関わってきた経験の中で，自由記述の結果についてカテゴリー分析を行なった。その結果「園庭での遊び」「植物遊び」「自然体験」「ごっこ遊び」「栽培/収穫」「飼育」の6つのカテゴリーを抽出した。その中でも，幼稚園や保育所の活動での経験と考えられるものもあったが，園外の活動と考えられる体験をしている内容が見受けられた。「植物遊び」の数珠玉アクセサリー作りや「ごっこ遊び」の秘密基地・探検ごっこ。「栽培/収穫」の田んぼ/畑遊びや「自然体験」の山登り・木登り・川遊びなどである。自然豊かな遊びを経験してきた様子が伺える。

「自然環境が豊富であることについての希望」の意識に関して，非常に必要55人（55.6％），必要39人（39.4％）を合わせると，94人（95.0%）の学生が自然環境への必要感について回答しており，保育者としての視点から，イメージや認識の中に子どもの成長に自然との関わりの重要性を見出していることが示唆された。

「理想の園で重視する点」においては，理想の園についてデザインを描いた際，重要視した点の自由記述についてカテゴリー分析を行なった結果「園舎」「園庭」「園の周辺環境」の3つのカテゴリーを抽出した。「園舎」の記述内容の例では，オープンテラス・ツリーハウス・プラネタリュームなど，若者らしい考えが反映されている。「園庭」の記述内容の例では，のびのび活動できる広さ・植物が沢山ある・山川がある・水遊びスペースが充実している・広い園庭・芝生など，広々とした園庭の中で自然を満喫した遊びを展開したい意図が伺える。「園の周辺環境」の記述内容の例では，病院が併設されているとあり，何かあったときのために病院との連携がとれ，安全が確保される環境を考えている。また，老人ホームが併設されているとの記述では，現代の核家族の中での世代間の交流に着目している環境の必要性も感じられた。

「子どもが成長するために自然環境の必要感」に関して，非常に必要55人（55.6％）と必要39人（39.4％）を合わせると99人中94人（95％）の学生が回答した（Table7）。

保育士養成の科目の中で，環境をとおして教育・保育していくことの大切さを学ぶ中での「子どもが成長するために自然環境が必要である」という認識の表れであることが示唆された。

虫に対する親和感に関しては，ここで言う虫の定義として，園で扱う身近な昆虫などを指している。園内で意図的に虫などを飼育することで，子ども達の興味関心を引きだし，感性を磨き，次への意欲へと繋げていくものとして，多くの園で取り入れている。

無藤（2011）[9] は，身のまわりにいるさまざまな生き物や，園内で意図的に飼育する生き物など，保育者はそれを保育の中に位置づけていかなけれ

ばならず，小さな虫から哺乳類まで，生き物は子どもたちを引きつける大きな力をもっていると述べている。

B短期大学とC専門学校において，ｔ検定を行った結果，「虫に対する親和感」において，B短期大学の方が有意に高いことが示された。B短期大学の学生は，「2. 自然環境と関わりについての実態」でも述べたように，自然環境豊かな環境で育ってきているという背景の他，大学での環境も少なからず影響しているのではないかと考えられる。環境の授業では，グループの活動として自分達で選んだ花苗木の栽培を責任もって行っている。また，ヤギと直接触れ合うことのできる授業の他，学外での収穫体験，収穫した野菜での料理の体験等の活動がある。キャンパスは緑に溢れ，当然虫も身近にいる。一方，C専門学校においては，幼少期に何らかの事情から，自然環境への接触をもつ機会が少なく，自然の中での様々な経験をしたことが乏しい学生がいるのではないかと推察される。自らの育ちの過程や日常生活の中での自然環境と関わる機会が少ない体験の他，現在も鉄筋コンクリートの高層ビルに囲まれ，木や土といった自然の物少ない都会の環境に身を置いている中で，自然に対する興味や関心の薄さ，虫や動植物への嫌悪感などが生じていることが考えられる。

自分が理想とする園についてのデザイン画については，斬新で新しいアイデア溢れる作品やアニメの世界などが多数見られた。中でも広々とした花のある園庭や大きな実のなる木があり，緑に囲まれた園庭，水辺の生き物や動物と身近に触れ合える環境をイメージしたデザインが見受けられた。(資料1)。

V．結論

B短期大学とC専門学校の学生の保育環境の意識とそれに関する要因について検討した結果，大半の学生が，環境に関して興味関心をもっていた。また，理想と考える園での自然環境の豊かさへの希望や子どもへの自然環境への必要感では，9割前後の高い割合で，保育の自然環境の大切さが意識され，自然環境が子どもの成長において大切なものであるという認識であることが明らかになった。しかし，生育環境等から自然環境との関わりに差があることも明らかになり，幼少期から現在の経験，生活環境なども自然環境に対しての認識に多少なりとも影響していることが示唆された。これは，無藤ら（2018）[10] の子どもをとりまく環境の中でもとりわけ自然物は，ほかのものでは代替できない経験を子どもたちにもたらしており，とくに近年，都市化や情報化などの社会環境の変化により，子どもが自然と直接触れ合う機会や経験が少なくなっていると言われていることからも，乳幼児期における自然との関わりは非常に重要だといえる意見と共通するものがある。

また，無藤ら（2011）[11] は，虫の苦手な子どもは，触れるのも近くにいるのも嫌がる子どもも見かける。虫を嫌う理由はというと，外見が気持ち悪いから，手に持っていたらつぶれたことがあるから，刺されるといやだからなど，子どもによっていろいろである。親や家族，近くのおとなに虫嫌いがいて，その影響で，という場合もあるだろうと子どもの虫に対する実態を述べている。また，保育を専攻する学生のなかにも，意外と虫嫌いは多いのではないかと推察される。しかし，それはなるべく克服しておいたほうがよいと思うと保育を専攻する学生の虫嫌いについて重ねて述べている。このように，子ども自身が虫に嫌悪感をもつことや回りの大人の影響もあることが伺える。筆者も子どものうちから，虫が苦手な子を見かけるが，逆に子どもにとって興味の対象であるともいえる。そのことからも，保育を専攻する学生や現場の保育者は，虫に対して親和的な感情をもって子ども達とかかわっていく必要があると考えられる。

５領域を横断した学習のとりくみでは，昆虫を題材とした紹介として紹介した渡部ら（2016）[12] の研究がある。亀井（2018）[13] の研究では，虫を通じて子どもと関わることで，学生は，「共同観察によって子どもの内的感情を推しはかる」，「子どもを客観的な対象としてとらえ直す」，「子どもの学びや理解を推測する」，「保育者としての姿勢について鑑みる」など，多くの保育者としての学びにつながる体験ができているということを明らかにしている。田宮（2011）[5] は，環境保育を意識しながら臨むことが求められ，どのように幼児のための環境づくりを進めたらよいか「生活の中で感性を育てること意識する」と述べている。この様なことからも，保育を専攻する学生は，特に

身近に自然を意識しながら，興味関心を持ち，保育に活かす感性が求められる。自然環境と接する機会が少なくなっている都市部では，特に園の環境に対する設定について，子ども自らが環境に関わり，自発的に活動し，様々な経験を積んでいけるようにしていくことが大切である。そして，保育を専攻する学生が子どもの視点から自然環境に出会い，共に感動し，不思議に思うことから，感性を高められるような環境や自然との繋がりに気づく活動，子どもの気づきを促すことができるようなコミュニケーションを大切にすることが求められる。

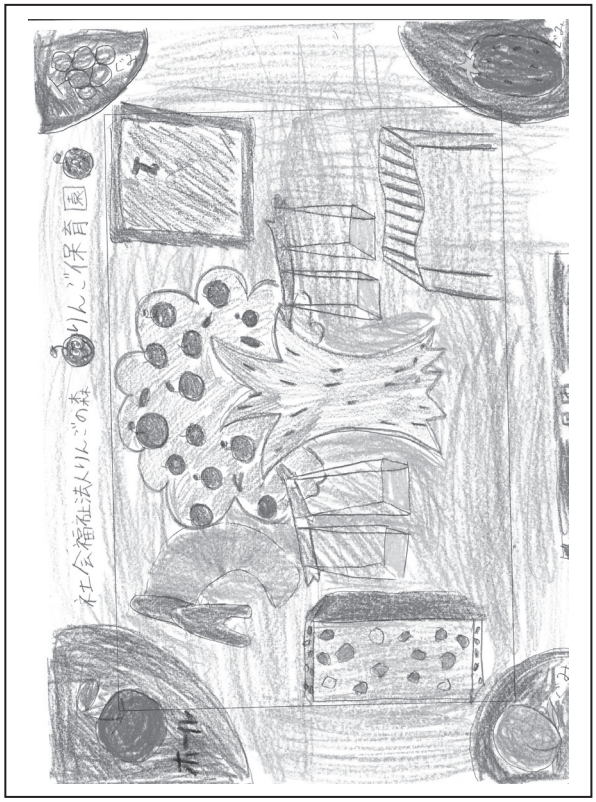
謝辞

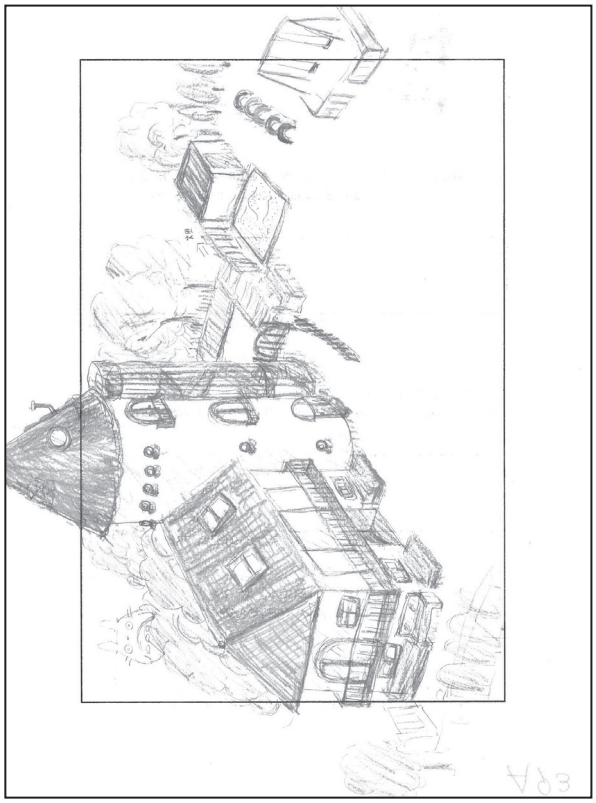
本調査に協力いただきました学生の皆様に感謝申し上げます。

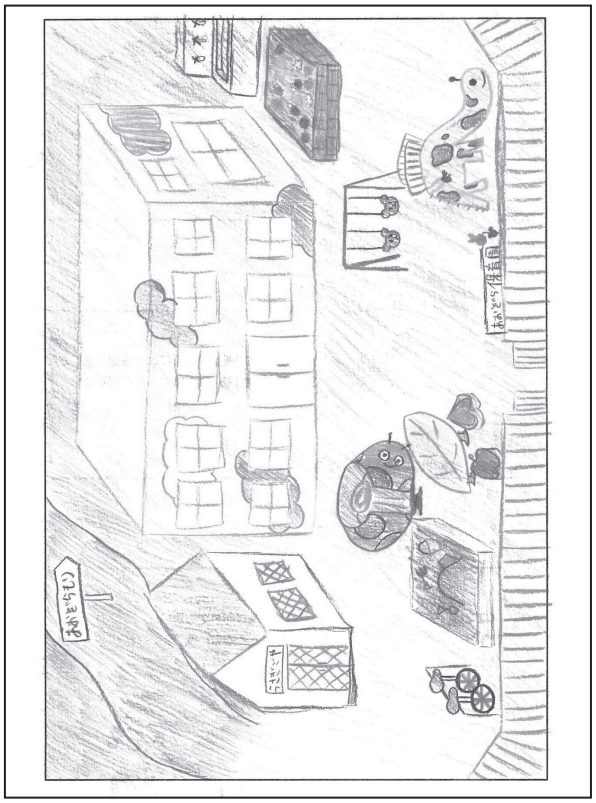
引用文献

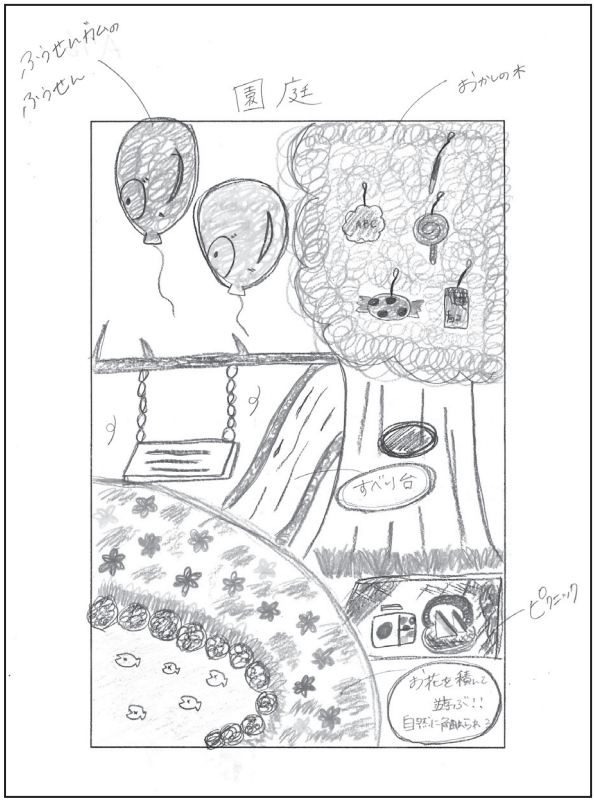
1）近藤幹生・徳安敦・瀧川光治・杉浦広幸．生活事例からはじめる―保育内容―環境．2016，p.12
2）厚生労働省．保育所保育指針解説書　フレーベル館　2008，p24 – 25.
3）相馬靖明．　2009年・2018年保育所保育指針新旧対照表（比較）- 臨床育児・保育研究会．2018．http://ikuji-hoiku.net/educare_wp/staffblog/1763.html
4）近藤幹生・徳安敦・瀧川光治・杉浦広幸．生活事例からはじめる―保育内容―環境．2016，p.24
5)田宮縁　『「体験する　調べる　考える　領域「環境」」2011，p.8-9.
6）株式会社クラレ．新小学1年生の女の子が「将来就きたい職業」トップ20，2017．https://www.kuraray.co.jp/enquete/2017/girls
7）無藤隆・福元真由美．新訂　事例で学ぶ保育環境：萌文書林．2018，p.80.
8）田川一希・新井しのぶ・石田靖弘．保育の領域「環境」において，保育者の「虫嫌い」を緩和し，身近な昆虫を保育に活用する方法 ―保育者・教員志望の学生の昆虫に対する認識調査と昆虫観察会の実践を通して―．中村学園大学発達支援センター研究紀要．2018-02，9，67-76.
9）無藤隆・福元真由美編．事例で学ぶ保育内容　領域　環境．萌文書林．2011，p.67.
10）無藤隆・福元真由美．新訂　事例で学ぶ保育環境：萌文書林．2018，p.49.
11）無藤隆・福元真由美編．事例で学ぶ保育内容　領域　環境．萌文書林．2011，p.156
12）渡部美佳・佐藤邦子・大澤力. 保育者養 成課程で学ぶ領域横断型学習に向けた基礎調 査―「昆虫」を用いた取り組み―東京家政大 学研究　紀要．2016，56（1）, 167-171.
13）亀井美弥子．保育者養成課程の学生と子どもとの保育現場における虫を通じた 関わり：幼稚園教育要領「環境」の視点から　湘北短期大学紀要 2018 ,　39, 61-70.

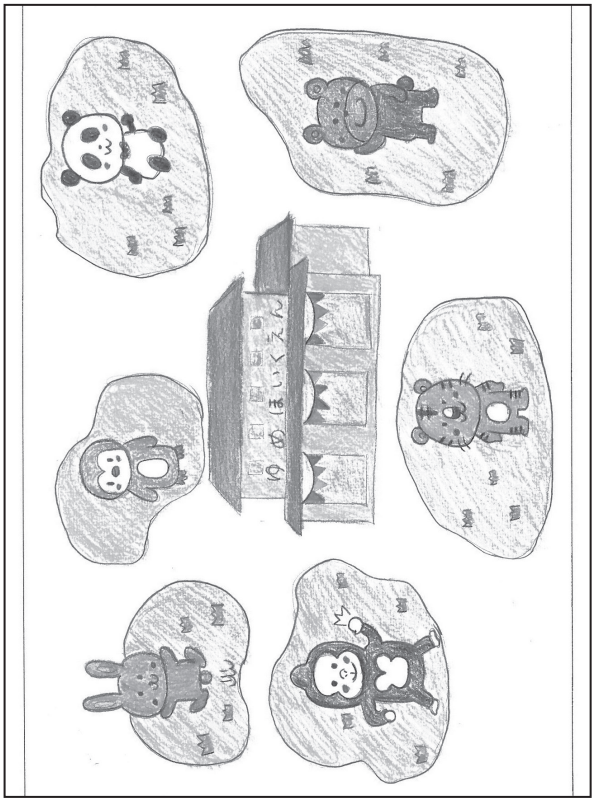
資料１：自分が理想とする園

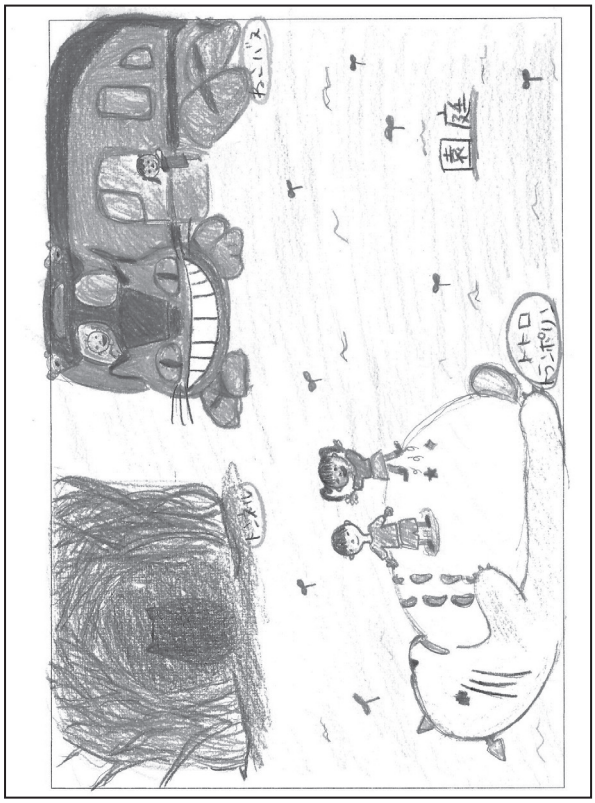


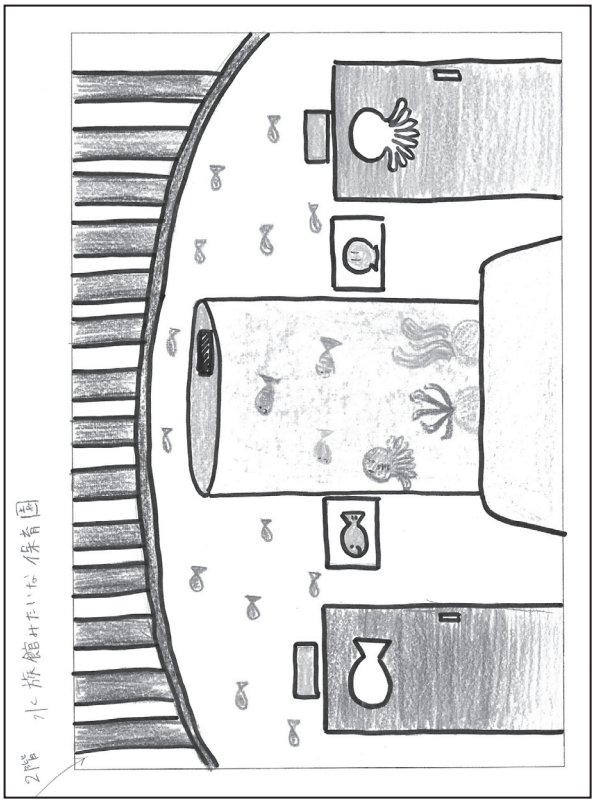



ようこそ
ようこそ
ようこそ


園庭
ぶうせん
ぶうせん
おかしの木
ABC
すべり台
ピクニック
お花を積んで
遊ぶ!!
自然と一体感


ゆめはいくえん


園庭
ねこバス
トトロ
トトロ


2階 小と旅館みたいな保育園